

「50 歳以上の骨軟骨損傷に対するモザイクプラスチック(自家骨軟骨移植)の治療経験」

神戸大学大学院医学系研究科器官治療医学講座整形外科学整形外科
川上洋平, 黒田良祐, 石田一成, 佐々木謙
木下恵祐, 水野清典, 黒坂昌弘

【目的】近年、骨軟骨損傷に対して、自家骨軟骨柱移植(モザイクプラスチック)が広く行われるようになってきており、その治療成績は良好との報告が多い。しかし、その適応年齢には限界があるとの見解がある。今回、我々は50歳以上の骨軟骨損傷の患者に対し、モザイクプラスチックを行い、良好な経過を得られたので報告する。

【症例1】57歳女性。バレーボールのプレー中に着地した際に左膝痛が出現。近医にて保存的加療を行うも疼痛続く為、受傷後8ヶ月で当科紹介受診。単純X線ではアライメントは正常で、関節裂隙の狭小化は認めなかったが、MRIにて大腿骨内顆に骨軟骨欠損を認めた為、モザイクプラスチックを施行した。術中鏡視下に4×10mmの骨軟骨欠損を認め、同側の大腿骨内顆内上縁より2本の骨軟骨柱を移植した。術後1年で疼痛や可動域制限を認めず、MRIでも移植部の軟骨面の修復像を認め、スポーツ復帰を果たしている。

【症例2】54歳女性。6ヶ月以上続く左膝痛の為、当科受診。左膝腫脹を認め、軽度の可動域制限を認めた。MRIにて骨軟骨損傷を認め、モザイクプラスチックを施行した。術後1年で左膝痛は認めず、術前の活動レベルに復帰し、MRIでも移植部の修復像を認めた。

【考察・結語】骨軟骨欠損の治療法はドリリングやマイクロフラクチャー、モザイクプラスチック自家培養軟骨細胞移植など様々な治療法が報告されているが、いずれもその軟骨形成能の年齢による低下のため、適応年齢に上限があるとされている。しかし、モザイクプラスチックは、軟骨損傷を自家硝子軟骨で置き換え修復する治療法であり、その適応年齢の上限は拡大する事ができると考えられる。本症例のようにアライメント異常がなく、損傷部位の限局された症例では、50歳以上の活動性の高い患者にも有効な治療法になると考えられた。